

ダウンアンダーの国から①

大貫 映子

豪州では「レジャーが生活の一部」になっていきます。そこでは「楽しむ」だけでなく「危険から自分の身を守る」ことが要求されます。

昨年七月から西オーストラリアの州都、パースへ来ている。まずは一年（うまくすれば二年）の予定で、水泳を中心に豪州での幅広いスポーツ事情をいろいろ学びたいと思い、夫・子供連れでやって来た。できれば大学に入り、生涯スポーツとしての水泳、ハンディ

キヤップのある人のためのレクリエーションなどを勉強したいという目標で来たのだが、こればかりは私の英語力の問題で、どこまでいけるか？？うた。

水泳王国・豪州

「DOWN UNDER」(さかさまの国)のニックネームがある豪州は今が夏、真つ盛り。子供たちは夏休みで海、川、公共のプールとあらゆる場所で、全国展開の水泳教室が一斉に始まっている。日本の文部省にあたる教育省と「AUSTSWIM」という豪州水泳・水上安全指導評議会が主催する大規模なプログラムだ。安全に泳ぐテクニックを学びながら、水を通して自由に遊ぶ楽しさを体験させるといふ、とても興味深い内容である。

たとえ大学に入れなくても、将来は(言葉のわかる)日本で大学院に挑戦

したいという気もある。どのような結果になっても、とにかく「水の楽しさ」と自分の身を守る」ことを教える水泳指導法と、「レジャーも大事な生活の一部」という豪州流哲学はばっちり習得して生活を満喫したいと思っている。(二十五号までの榊井映里さんの連載「エリおばさん奮闘記イン筑波」が刺激になっている。)

まずはじめに、豪州が水泳王国なのだと感じたのは、プール施設の充実にパースには九一年に世界選手権の開かれた「スーパードローム」という総合スポーツ施設がある。そのこのプールは五十メートル×八コースが二面に、五十

メートル×十コースが一面(屋内に一面、屋外に二面)。室内にはダイビング用のプールも。一年中、一般公開しており、更にいくつもの競技選手のチームやマスターズ水泳のクラブチームもコース貸し切りで使用し、ここをホームプールとしている。スーパードロームは特別大きいのだが、ほかの市営プールも含め、どこも朝は五時半から泳げるといふのにも驚いた。閉館は夜八時〜九時というのが一般的。利用料は一〜三豪ドル(約八十円〜二百四十円)で、

回数券、年間パスなどもある。

午前九時〜午後四時まではチャイルド・ケア・センターと呼ばれる託児室(政府公認、町の保育園と全く同じ)があり、子供がいてもスポーツを自由に楽しめる環境が整っているのには、

ススンデいるなあとつくづく思った。予約は必要なのだが、利用料は一時間につき、たったの二ドル(約百六十円)。選手から八十歳を越えるベテランスイマー、浮き具をいくつもつけた赤ちゃん連れの家族までがみな、一年を通して利用しているのだから、本当に水泳が生活の一部となっているのだと感じる。

責任ある行動が基本

だいたいうるさい監視員というのがいない。日本で公共のプールへ行くと

アクセサリーをつけているといつては「ビーチ」、かたまつて泳いでいるといつては「ビーチ」とホイッスルがなる。が、こちらでは自分たちの責任で行動するということが基本。救急対策はきちんとされているが、「よっぽど」のことがない限り、管理する側も利用者を用意して余計なこと文句を言わ

ない」という姿勢なのだ。豪州人の英語の先生が教えてくれた。「利用者もいちいち小言は言われたくないでしよう」とも。そのかわり、小学生の時から水の事故の怖さや、水上安全法は学校の体育の時間で必ず習うのだ。

私の家の近くの屋外プールでは深さ四メートルのダイビング用プールが子供たちには大人気だ。高さ三メートルの飛び込み台から、時に五歳の子供までが思い思いのカッコウで飛び込み、キヤップキヤップと騒いでいる。飛び込んだ後、深い水の中から浮上してきたかと思うと、プールサイドまで器用に犬かきで泳ぎつく。そんな時、水泳の選手にはならなくていいから、わが息子もこうしたくまじい水の楽しみ方を身につけてほしいなあとちらりと「親」の気持ちになる私だ。

もともとは「山屋」でつい最近まで泳げず、豪州滞在五カ月にして山や雪が恋しくて仕方がない我がパートナーも、実はこのダイビングで遊ぶ自由な子供たちが大好き。私の目を盗んでは、ひそかに「自分も」と飛び込んで背中を真つ赤にしたり、首をねじったりしている。